

作業療法士と介護職の連携により活動性が向上した通所介護利用の事例

○ ^{コバヤシコウジ}小林幸治¹⁾・掬川晃一²⁾・長井陽海³⁾・猪股英輔⁴⁾

竹内さをり⁵⁾・小林哲也⁶⁾・下田哲也⁷⁾

1)目白大学保健医療学部 2)社団法人巨樹の会小金井リハビリテーション病院

3)一般社団法人東京都作業療法士会 4)多摩たんぼぼ介護サービスセンター

5)甲南女子大学看護リハビリテーション学部 6)やさしい手デイサービスゆめふる調布店

7)やさしい手デイサービスゆめふる通所介護事業部

【はじめに】

平成 24 年の改定で、介護保険は自立支援型サービスを推進する方向性を明らかにした。通所介護では居宅療養管理指導や個別機能訓練加算Ⅱが新設され、日常生活における生活機能の維持向上を図ることが強調された。療法士が地域で介護職と連携を進めることが期待される。

【発表目的】

我々は、平成 24 年度日本作業療法士協会による老人保健増進等事業で、通所介護連携事業を担当した。同協会の開発した生活行為向上マネジメントの活用法として、通所介護で介護職に対し、個々の利用者への生活行為向上プランに基づくプログラムを指導し、その実施を間接的に支援した。こうした介護職との連携について、今回は事例を中心に検討する。

【生活行為向上マネジメントとは】

作業療法において 30cm のものさしのように全ての OT が使いこなすことを目指して開発された、作業療法のプランからプログラムまでを立案するツールである。対象者からできるようになりたい目標作業を聞き取る、対象者中心主義を特徴とする。

【通所介護連携事業】

東京都内の通所介護事業所において、利用者に OT が生活行為向上マネジメント（以下、マネジメント）を用いて目標作業を聞き取り、実現可能なプランを立案し、そのための訓練プログラムを立案した。聞き取りは「作業聞き取りシート」を用いて、現状での目標作業の実行度と満足度を自己評価してもらった。プランとプログラムは施設の介護職に説明して引き継ぎ、介護職に日々のケアの中で実践してもらった。実施期間は平成 24 年 8 月～12 月。本事業には東京都作業療法士会が研究協力し、会員 OT 10 名を含む OT13 名が参加した。

【事例】

87 歳女性、要介護 1。娘家族と同居で、自宅内の日常生活動作は自立、家事は娘が行う。外出に付き添いが必要で、自宅では横になることが多く、家族が心配している。作業聞き取りから「俳句をみんなで楽しみたい」という達成可能なニーズを立てた。自己評価は実行度・満足度ともに初回 1、終了時には両方 8 になった。施設では、事例のために作品展覧会を開催し、俳句を出展するように働きかけた。出展作品は他の利用者の投票で最優秀になった。今度は自伝を書いてみたいと言い、他の利用者との交流も活発になり、表情が明るくなったと評されている。

【考察】

初対面でも、マネジメントを使用し、OT は通所介護利用者の生活をイメージしたプラン、プログラムを立案できる。介護職には、対象者とプランを確認し、目標に向かって取り組む姿勢が求められる。本事例は、具体的作業ができることは人を健康な生活に導くことを示した。